八代市厚生会館の
ホール再開を求める署名活動
〈 趣 意 書 〉

八代市厚生会館は、八代市民俗伝統芸能伝承館（お祭りでんでん館）の建設に伴って休館していましたが、この度、「ホール（劇場）としては再開しない」という方針が八代市から発表されています。

現代建築史的に価値のある建物の保存はもちろん、「八代市民に本物の文化芸術発信の拠点を」という建設当時の崇高な思いを継承するためにも、ホールの早急な再開を望みます。

つきましては中面をご高覧の上、ぜひ署名活動へのご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

●発起人名リスト（五十音順）

発起人代表：森精一

一般財団法人八代青少年育成会　歌の街実行委員会　球磨川温泉鶴の湯旅館　クラシックの風NPO法人You倶楽部
JJJ8246　青雲会　通町商店街振興組合　七日会　日奈久温泉旅館組合　本町一丁目商店街振興組合
本町二丁目商店街振興組合　本町三丁目商店街振興組合　まほろばカフェプロジェクト　モラトリアムラボ
八代アマチュアナイト実行委員会　八代市合唱協議会　八代市文化協会　八代美術協会　ラジオクロネコ

青島公美子	緒方光治	楠原正元	正野寿美子	鶴田素子	野崎陽子	福原孝子	麥田ヨシ子
秋田美智子	緒方純子	栗田明美	庄野博子	遠山昇司	萩野美喜子	藤井純	村井智子
秋山和美	緒方説子	桑原幸子	白石努	遠山千尋	橋本晏理	藤井咲弥	村橋亮子
天野昭子	緒方大輔	小浦和哉	白石真由美	遠山秀幸	橋本恵理子	二見孝一	村山忍
天野鉄和	緒方雅子	古閑祥高	杉英行	遠山芳江	橋本京子	古川逸夫	村山優一郎
飯田哲	緒方美紀	小嶋朋子	鋤田順子	徳澄義治	橋本早苗	本田慎一	本岩潤子
石松幸子	岡本絹代	後藤義弘	杉山幹郎	飛石幸弥	橋本正慈	前山光則	本岩孝之
出水晃	岡本美鈴	小早川恭子	進太郎	豊田景弘	橋本徳一郎	松島壽市	森下美佳
出水明美	岡本力也	酒井道也	瀬川信子	長江逸子	橋本典香	松本一俊	森浩喜
磯田節子	奥田ゆかり	酒井弘美	園田啓矩	長江弘至	橋本凜	松本寛三	守田知愛子
伊藤由夏	尾崎幸子	坂井米夫	髙岡明子	長江政弘	羽田野祥子	松本啓佑	守田富男
伊藤敦子	尾崎成喜	坂川昌生	高木利恵	長江文子	羽多野俊光	松本麻衣子	森山学
伊藤礼子	尾崎美子	坂口祐弘	高野喜代美	長江由美子	服部淳子	松本美佐緒	守屋みつえ
井上晴美	小沢恵子	坂田一郎	竹内幹雄	永椎直美	早川豊	丸塚裕子	山浦滋男
井本真由美	小野寿彰	坂田尚子	竹田節子	中島剛史	林暁明	三浦明	山口功倫
入江浩子	小野直子	坂田誠	武元千絵	永友夏希	林扶充子	溝口隼平	山田賢治
岩村真一朗	甲斐田栄	坂部彰	田尻文子	中野寛之	原田澄	道野紗喜子	山田重典
岩村万希子	笠井麻衣	酒井有紗	田尻みさ	中野雅郎	原田聡明	道野真人	山田倫子
上野智子	笠井光俊	坂本桃子	多田満	中野祐子	閘真惟子	満田隆二	山本隆英
上野留美	萱嶋晶子	櫻井明美	田中伸子	中野良樹	閘優子	光永淳子	山本雅子
内田サナエ	萱嶋義邦	櫻井一郎	タナカ・ミオ	永松政枝	日隈志郎	南敬介	弓削久美子
宇野光	河本佳子	櫻井力助	田中陽子	中村富美雄	平野清満	皆吉剛	吉田暁美
江上晋	岸部孝子	佐々木康邦	谷勝代	中山悠	平山信夫	簑田昌子	吉田奈見子
江崎桂子	岸良佳奈	佐藤士郎	谷崎雄樹	中山ゆふや	福岡邦子	宮崎翼	吉永令子
江崎博美	木山信介	佐藤タエ	谷次雄	中山頼行	福岡聖子	宮崎芙美子	吉野啓子
榎田利枝子	木下マリ子	澤井孝幸	田原大樹	成尾敬三	福岡信夫	宮崎貢	綿貫美佳
大坪由季	桐俊朗	柴田陽子	丁畑幸美	成尾玉美	福島晃	宮田薫	藁井信恒
大平貴彦	久木田秀子	四丸雅子	告美穂	成尾善明	福島和敏	宮田剛	
大平章子	楠原なぎさ	庄野眞一	堤佳寿子	西尾京子	福田秀俊	麥田康利	

八代市厚生会館のホール再開を求める会

お問合せ先／090-1701-3353

hallsaikai@gmail.com

❶ 八代市厚生会館の歴史と価値

八代市厚生会館（以下、厚生会館）は昭和37年（1962年）、八代城北の丸だった区域に県内初の公共文化ホールとして完成しました。当時は、熊本市にもなかった本格的で現代的なホールでした。設計したのは**世界的な建築家・芦原義信氏**※1です。八代城跡との調和など、**外部空間を生かす芦原氏の建築思想**※2の「出発点」とも言われています。また、当時の市長・坂田道男氏の「**ウィーンのオペラ劇場（ブルグ劇場）**※3にも劣らないオーディトリアム（ホール）を」という願いを受けて設計され、座席数９６４席でありながらもコンパクトな造りは、「八代市民に本物の文化芸術を」との考えに基づいています。

また、音響は全国の著名なホールの音響を手掛けていた**石井聖光氏（東大名誉教授）**※4が担いました。**能**※5などの古典芸術も公演できる造りとなっています。

2021年6月、近代建築の記録・保存活動をしている**国際学術団体『DOCOMOMO（ドコモモ）』**※6の日本支部が、厚生会館を「日本におけるモダン・ムーブメント建築」に選定した、と発表しました。県内では６件目ですが、県南では初の認定です。

栗田勇著『現代日本建築家全集（1971）或る優しさ』より

『建築文化（1962-9）八代市厚生会館の覚え書き』より

❷ 八代市厚生会館の役割

景観面での八代城跡とのマッチング、中心市街地に立地することによる賑わいづくりの核であること、現代建築史における重要性など、厚生会館が持つ意味や価値は計り知れないものがあります。

八代城跡から厚生会館、伝承館、博物館、澤井家、松浜軒、松井神社庭園などが並ぶこの一帯は、江戸時代から現代までの八代を一気に回遊して見渡せる、まさに象徴的な区域と言えます。

ホールについては、これまでも**数多くの世界的オーケストラや演奏者が舞台に立ち**※7、指揮者やコンサートマスターから高い評価を得ています。さらに、「八代唯一の音楽ホール」として、八代市民文化祭をはじめ長年に渡り市民への開かれた利用により、八代の子ども達の文化教育の発展に多大な貢献を成し遂げてきました。

落成当初より、「教育・文化・芸術を愛好する品格ある市民を育てること、“八代市民格”の育成」を使命とした『文化の殿堂』を継承し続けることが求められています。

❸ 八代市厚生会館の現状と私達の思い

完成から約60年が経ち、部分的な劣化も見られますが、２回の大規模改修・耐震補強工事が実施され、熊本地震の影響もほとんど見られませんでした。しかし、八代市民俗伝統芸能伝承館（お祭りでんでん館）の新工事に伴い、厚生会館の別館が解体された際、**配電・空調の管理設備も撤去されたことで、余儀なくホールの再開が不可能な状態となった**※8のです。工事中の閉鎖はともかく、お祭りでんでん館開館後も本館の閉鎖状態が続き、今後老朽化の進行が早まることが予測されます。

こうした現状から、補修・整備をするには多額の資金が必要と思われますが、「数年に分散して工事を進めるなどの工夫をすることは可能ではないか」との見解もあります。しかし、再開するために必要な処置には最低限どれくらいの費用がかかるのか、その詳細は明確に提示されておりません。

以上のようなことを踏まえ、より詳細な調査を早急に進めるべきだと考え、署名による「厚生会館を再開させたい」という市民の意思を、八代市長に提示したいと思います。

●注釈解説

※1　**芦原義信（1918～2003）**　世界的な建築家。駒沢オリンピック公園総合運動場体育館・管制塔、ソニービル、東京芸術劇場などの作品で知られ、『街並みの美学』ではいち早く都市景観の重要性を述べた。東京大学卒、ハーバード大学院修了。法政大・武蔵野美術大・東京大教授。日本建築学会・日本建築家協会会長。イタリア・コマンダトーレ勲章など国内外から評価される。**「八代市厚生会館は、八代市長の芸術に対する高い理想と郷土に対する強い情熱の賜物として実現されたもの。長く八代市の文化活動の中心として美しく維持されることを祈る」**と建設当時の建築雑誌で綴っている。

芦原義信

別館（※2019年に解体）越しに見る本館

本丸石垣と本館で囲まれる広場

photo ©熊本高等専門学校 教授 森山学

※2　**「外部空間論」**　世界的に評価された芦原氏の建築思想。芦原氏の著書『外部空間の設計』などで述べられている。建物を作った後のあまりではなく、「屋根のない建築」として建物の中と同様に丁寧に作られた外の空間のことで、厚生会館を造る過程で考え出された。「外部空間」に関する芦原氏の著書は建築学生の必読書でもある。

厚生会館においては、八代城の西側の一郭を敷地としており、本館と別館（現在別館は解体）がつくるL字型、並びに堀端通り向かいの本丸石垣により外部空間を囲み、都市スケールの広場を構想した。この広場に面して、建物基壇に登る階段、大きな2階テラス、テラス下のピロティがあり、広場に多様な活用の可能性をもたらす。ピロティは本丸石垣の風景が美しく切り取られるよう計画され、そこで佇むこともできる。

※3　坂田道男氏は厚生会館のホールの大きさに悩み、息子である道太氏が欧州視察へ出かける際にウィーンのブルグ劇場の視察を依頼し、収容人数を1,200に決定した（実際の座席数は964で立見を入れて1,200となった）。1,000席を割っていることが特筆すべき点であり、人間同士のつながりを大切に設計し、歌舞伎、演劇、音楽会、講演会などに最適な大きさにこだわったものである。

※4　**石井聖光（1924～）**　東京大学工学部建築学科卒業。工学博士、東京大学教授、同大学名誉教授。日本音響学会会長（1979～1981）。日本の数々の名ホールの音響を手掛けた、日本音響史の草分け。**カラヤンが「世界一の音響」と評した大阪・朝日放送のザ・シンフォニーホール**も石井氏が音響設計を手掛け、音響基準の究極系「残響2秒」を現実のものとした。

※5　**能**　中世八代城（古麓城）の時代から、相良氏、島津氏によって能が興行されており、近世、八代城に入った細川家・ 松井家も能を重んじたことから、武家や町人の間で能が愛好された。明治以降も盛んに能が催され、能楽の重要無形文化財総合指定保持者、松井祥之氏（1923～82）、栗田亮蔵氏（1918～2006）が活躍。現在も、金春松融会（熊本市）や櫻間右陣氏（金春流能楽師、重要無形文化財総合指定保持者、東京在住）、松井笙子氏（祥之氏長女・柳川市在住、金春流シテ方職分）らが活動している。

能舞台については、1934年、弓削和三氏邸内にあった能舞台を現博物館敷地内に移築。1986年に博物館建設に伴い、熊本水前寺公園内出水神社へ移築された。国内で現存する能舞台としては5番目に古い歴史ある能舞台だった。その後、日本の能楽は「人類口承及び無形遺産の傑作」として2001年には世界無形文化遺産に登録された。

厚生会館は設立当初より、「八代の文化の柱であった能を演舞できるように」と、舞台器具として能舞台、所作台、松羽目、金・銀屏風を完備していたため、閉館となれば八代で能を演じる舞台が消失することとなる。

『市政50周年記念 金春流松融会演能会』のチラシ（平成2年11月）

※6　**国際学術団体『DOCOMOMO』**　（ドコモモ、International Working Party for **Documentation** and **Conservation** of buildings, sites and neighborhoods of the **Modern Movement**）　1988年に設立された近代建築の記録と保存を目的とする国際学術組織。DOCOMOMOは英語表記における頭文字。

※7　厚生会館のこけら落としでは**金春流の能の上演、東京交響楽団の演奏が披露された。**全国でも八代市が先駆けて実施した自主文化事業では「すぐれたものを、より多くの人に」をモットーに、年間９～14本に及ぶ事業を実施。特に国内外の著名な演奏家、あるいは演奏団体を招聘した。大阪フィルハーモニー交響楽団、ウィーンフィルハーモニー室内合奏団、新日本フィルハーモニー交響楽団、パイヤール室内管弦楽団、中村紘子、海野義雄、堤剛、園田高広、安川加寿子、イングリット・ヘブラー、二期会、ベルリンフィルハーモニートリオ、ウィーン・モーツァルト合唱団、ロジェワーグナー合唱団、劇団民藝、劇団雲、民芸座、文学座、劇団四季、無名塾、松竹大歌舞伎、タチアナ・シェバノワ、ミルト・ジャクソン、近藤等則、野村万作、野村萬斎、栗原小巻、矢沢永吉、東儀秀樹、一青窈他多数が公演を行った。

また、市民の参加する文化活動として「市民合唱祭」「高校演劇大会」「小中支援学校音楽会」、舞台芸術の鑑賞普及に「歌舞伎」「オペラ」「文楽」「能・狂言」「新劇」「バレエ」その他各種の音楽会、さらに学習と事業参加者の層の拡大を目指し、「音楽・芸術生活講座」「文化講演会」「中学生音楽教室」「青少年・子ども芸術劇場」等も実施した。

パイヤール室内管弦楽団の演奏会（昭和47年5月）

※8　2019年7月、お祭りでんでん館建設に伴い、厚生会館別館が解体。別館に配置されていた本館の配電・空調の機能を担う機械棟については「移転の予算をつける」と市民・有識者へ説明し、でんでん館のオープンに合わせて厚生会館を再開するとの方針を持っていたが、市は移転の予算を付けないまま解体へと踏み切った。それによって実質、厚生会館のホール使用は物理的に強制終了したことになるが、市はこのことを市民に告知しなかった。この決定に至る経緯は極めて不透明である。

また、市議会議事録（平成28年12月定例会）によると、「伝承館（お祭りでんでん館）建設地を厚生会館別館跡地へ」と決定した経緯も議会内では話し合われておらず、庁内のみで方針を固めていたことが明確に記されており、「議会軽視」であるとの指摘もされている。